

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.149



高屋窓秋について

大井 恒行

こんにちは！ 最初に少し思い出話をさせて下さい。高屋窓秋に最初にお会いしたのは、国立の「ロージナ」という喫茶店です。その時は二階の席で、たまたま、ボクと仁平勝で話をしていた斜め前の席に三橋敏雄さんと一緒に座っておられました。今、考えてみますと、丁度『現代俳句の世界16 富澤赤黄男 高屋窓秋 渡邊白泉』（朝日文庫、昭和60・5）が出版される少し前のことです（窓秋75歳の頃）。三橋さんは、朝日文庫収録の俳人の解説をすべて一人で書かれていますから、その打合せだったのではないのでしょうか。その時、三橋さんから高屋さんを紹介していただいたのです。

さて、本題の高屋窓秋ですが、明治43（1910）年2月14日に名古屋市中生まれ、本名正國。父は庸彦、母くにの長男。父は陸軍の軍人（明治17年～昭和40年、享年81）、母は長子出産後に、結核に冒され生涯病身（明治23年～昭和29年、享年64）でいらつしたようです。窓秋自身は、平成11（1999）年1月1日に88歳で亡くなられます。24年前のことです。ですから、今日お集まりの方の中には、高屋窓秋が存命だったところに直接、会われている方もいらつしやるのではないかと思います。作品についてみますと、あまりにも有名な窓秋の句ですが、

頭の中で白い夏野となつてゐる

（昭和7年「馬酔木」1月）22歳
この句について、「馬酔木」三羽鳥の一人・石田波郷は「この句の『白い夏野』は現実の夏野ではない、抽象風景である。『白』を詠もうとしている写生俳句とは全くべつである」（波郷・俳句講座6）と言っています。水原秋櫻子や山口誓子すらもこの句の新鮮さに及ばなかった。当時の多くの俳人たちにと

多摩風土記（天然水）

青梅市に昭和三〇年代には天然水のスケートリンクがあった。当時町田市南大谷の釣り堀で、冬は天然水を切り出していた。水は氷室に蓄積し、夏場は蚕室の温度管理用に販売していたという。この池では、子どもたちがアイススケートをしたのだという。同市小山田でも水田に水を張りスケートリンクにしたのだという。

（健介）

びきり新鮮な感じをもたらした俳句でした。

ちるさくら海あをければ海へちる

(昭和8年) 23歳

山鳩よみればまはりに雪がふる

(昭和9年) 24歳

皆さんは、高屋窓秋という俳人についてどのような印象を持たれているでしょうか。人口に膾炙したこれらの句をもって、高屋窓秋に対するイメージが決定づけられているのではないのでしょうか。いわば甘美な抒情の人。つまり、高屋窓秋の二十歳代初めの句をもって、窓秋の句のイメージを作り上げてしまっているのではないのでしょうか。ここでは、特に、高屋窓秋の第二句集、書下ろしの句集『河』と最後の句集『花の悲歌』についてお話をさせていただきたいと思います。窓秋の俳句の書き方の底流としてあるのは、これは第一句集『白い夏野』から試みられていた方法ですが、新興俳句運動の特徴的な方法である①題詠と、②連作の方法を最後まで手放すことなく、その線上で俳句を書き続けたのではないかとということです。

そしてまた、窓秋の句を語ろうとすると、その作品が書かれた時代背景に触れざるをえません。新興俳句の勃興した時代は戦争が背景にあります。日常生活のなかに戦時体制がどんどん入り込んでくるわけです。これは三橋敏雄が言っていることなんです。「当時の私は、言ってみれば新興俳句即社会性俳句也の意識を以て、頻りに自身を励まし続けていたのだ」(第三句集『青の中』後記)。ということになります。社会からの影響をいやがうえにも受ける時代。大正時代デモクラシーの末期、治安維持法(大正14年公布・昭和3年と16年全面改正)によって思想や言論の自由が蹂躪され抑圧されていきます。

そうした状況下で、当時の若者たちが自らの気持ち正直に詠いたいという欲求をもち、その意識は、昭和の初めに唱えられた「花鳥諷詠」と「客観写生」を推進する高濱虚子の「ホトトギス」に対抗するかたち、つまり、四季の循環と田園風景を描くのではなく、日々の生活感情や日常を重視していくとする意識であり社会性即新興俳句だったのです。当時の健康な若者には戦場が、健康でない者、つまり、肺結核に冒された若者には死が、どちらにしても二十歳前後に死が待ち受けているという、当時の青年の追い詰められた状況が背景にあります。

新興俳句運動の療原の火も、昭和15年の「京大俳句事件」を嚆矢とする新興俳句弾圧事件によって、壊滅させられ、社会から葬られ、抑え込まれました。このような状況下で作られた高屋窓秋第二句集『河』(昭和12年)は書下ろし句集で、わずかに40句の句集です。

窓秋が「訣れの言葉」を「馬酔木」に発表して、俳句から離れて二年経ち、『河』(昭和12年)は発行されました。窓秋は一カ月で書き下すわけです。その『河』ですが当時では書下ろしという形で世に問うというのは、俳句の世界では非常に珍しいことだったのです。連作形式の特異な句集でもあります。『河』は九章・40句「全体を一篇の『連作』として書いた」と窓秋は言っています。

この「河」4句の連作の冒頭は、
河ほとり荒涼と飢ゆ日のながれ
で、三句目が「日空しくながれ流れて河死ねり」です。この句の自註に「恐ろしく早いテンポで、戦争への足音を高めてい

た。全国的な困窮が、国民を戦争へと追いやっていった。……こうした光景がうかんできた」と言っています。

● 嬰兒抱き母の苦しさをさしあげる

この句は「嬰兒」の二句目にある句ですが、「あまりにも、理詰めの文体。昔からある彫像のように書けてしまった。作者のこころは重たかった。いったん、こうしたかたちで出来てしまふと作りかえることがむづかしい」と窓秋は語っています。窓秋の愛の深さに心撃たれます。

そして、窓秋最後の句集が『花の悲歌』（弘栄堂書店）です。252句収載、平成5（1993）年、83歳の時です。次のような作品が残されています。

きりぎりすきのふのそらのきのこ雲

花の悲歌つひに国歌を奏でをり

核の冬天知る地知る海ぞ知る

砲弾に罪なき十萬億土かな

ボクは、縁あって『花の悲歌』を作らせていただきました。ですから、原稿と初校のゲラを比べて、推敲改作され、決定稿となった句をあげて、高屋窓秋の作句の在り様にふれて考えてみたいと思います。収められた句数が252句のうち49句が改作されました。大雑把にいうと約2割が改作されている。普通ですと、句集原稿にしてからこのように多くの句を改める人はいないと思います。典型的な例を少しあげてみます（『花の悲歌』原稿句と推敲後の句との異同——●が原句、○が推敲改作後の句です）。

● 粉雪やちいさな嘘に小止みなく

○ 粉雪や小さな家に小止みなく

句の中の言葉「嘘」が「家」に推敲されました。「嘘」という抽象的な言葉から具象性のある「家」という言葉への変更。「嘘からでたまこと」ではありませんが「家」の方が一句の世界は広がります。それは、次の句でもいえます。

● 命絶ち倒れし木の香数知れず

○ 命絶ち倒れし木の香神知れず

「数」から「神」への変更です。句の世界が一挙に神的な世界まで表象してくるようです。「数」の音「カズ」から「カミ」・「神」を呼び出しています。

● 垂直の時間を信じ揚雲雀

○ 垂直の時間を上下揚雲雀

この句は、「信じ」を「上下」と変えることによって「垂直の時間」といういささか抽象的な表現が『上下』によって関係付けられ、「信じ」という主観的な表情が、抽象的ながら、具象性を感じさせる「上下」の表現で、下五「揚雲雀」の幹旋が見事に収まるのです。

こうした俳句の作りようを見ると、いわゆる写生の方法で句が書かれてはいない。つまり眼前の景、眼前にある景色ではない、眼前の写生なら、その景にこだわるでしょう。高屋窓秋はそうではない、適切な言葉をもって句の世界を創造しているのです。ご清聴ありがとうございました。

（注・講演の最後に、ALSで病床に臥す折笠美秋へのお見舞いメッセージがテープに音源として残されており、高屋さんの声を二、三分ですが皆さんに聞いていただきました）。

あけぼの集

木枯や屋台でワイン口にしつ 八王子 青木 隆
 歳晩^{さいばん}や施設に老いし妻元氣 東久留米 青村 萌生
 鎌倉の仲良き兄弟の 四日 八王子 赤野 四羽
 シュレツダーの底の残滓や神無月 国分寺 秋山ふみ子
 三島由紀夫の果てし市ヶ谷落葉風 多摩 足立喜美子
 夜食粥モノの日の出のごとく黄身小 平安達 昌代
 終活の覚悟ばかりや生姜酒 清瀬 穴原 達治
 いのこずち遠慮会釈のなき仕業 稲城 新井 温子
 縁側に他所の猫居る文化の日 八王子 荒川勢津子
 立冬や正しい嘘をポケットに 町田 有坂 花野
 冬の梨八冠棋士の八重歯かな 国分寺 安西 篤
 抜打ちの開戦日なり 鵲鳴けり 足立 飯田 和子
 夜半の秋ナースコールにどうしました 東久留米 飯田 玉記
 石二つの弁慶の墓 冬紅葉 多摩 石川 春兎
 サンド・アートの崩れるばかり 冬汀 小平 石橋いろり
 湯気の香を目を閉じて聞く 冬至風 呂練 馬石原 俊彦
 野菊咲く無垢の赤子のように かな青 梅一ノ瀬 順子
 鯛焼の尾鰭この世のなり行きて 狛江 伊東 類

石段の残り見上ぐる 七五三町 田稲吉 豊
 品種改良甘し林檎とは言えず 町田 今田 述
 新蕎麦あります ハーモニカ横丁 武蔵野 内田 牧人
 ふくろふのふくらみきつて夜を待つ 武蔵野 江中 真弓
 木枯しよいまはむかしの万国旗 府中 大井 恒行
 クリスマスイブはつまづきながら来る 府中 大石 雄鬼
 妻しのぶ銀杏落葉のきりもなや 日野 大槻 正茂
 指先に新米を炊く 水加減 八王子 大谷みどり
 日脚伸ぶステンドグラスの青がいい 川崎 大西 恵
 またたびの煌めく夜は良夜にて 三鷹 大森 敦夫
 気候異変も初木枯しに安堵せり 昭島 岡崎たかね
 新聞紙邪^{じや}払^{はら}みかんを包みけり 三鷹 小川 葉子
 霜月や風邪引き猫の甘へ来つ 飯塚 奥野 亜美
 里祭り文久二年の大幟 川崎 尾崎 太郎
 散紅葉両手を広げ舞ふ 少女 昭島 尾関 英正
 紅葉来てモノクロの街語りだす 青梅 小野こうふう
 ひとときを育てる 碧さ 冬木立 西東京 金谷サダ子
 行く秋の石段急登老いをかこつ 日野 亀津ひのとり

あけぼの集

背を丸め出掛ける夫や年暮れる 西東京河 順子
 青芒を搔き分けて高野氏逝く 立 川川島 一夫
 木枯らし一号無沙汰払ひの都心かな 調 布菅 さだを
 薄紅葉スマホに映し子に送る 清 瀬神崎 幸子
 補聴器も付度も捨て冬あたたか小 平城内 明子
 イブの夜新幹線であと一つ大 田小泉満知子
 色変えぬ松やメリハリある暮し 三 鷹高坂 栄子
 風花や渡り納めの跨線橋 西東京 幸村 睦子
 意味もなく月がきれいと言う男府 中小林 育子
 不得意なものに運針一葉忌町 田小山 健介
 人の皮を被った動物というぞ立 川今野 修三
 芒原ワタシハドコヘイクノデセウ多 摩 斉田 仁
 水滴へ垂るる水滴近松忌昭 島坂本 空
 冬菊やすべて前世の約束よ 東久留米 佐々木克子
 師走来てまた一つ歳増えにけり府 中 笹木 弘
 たまさかに瀬戸の吐息のふぐ提灯府 中 佐藤 栄子
 寒紅にかこつ無聊を鎮ませて 調 布 佐藤 茉
 吟行の人はメモするばつたんこ 昭 島 佐藤 光子

人混みをさらりとかわす秋の風杉 並島 彩可
 クリスマスリースの花環河原葛足 利清水 弘一
 神の留守統一教会法縋る 清 瀬下田 峰雄
 豚足を食ベコラーゲンぷるん秋世田谷 鈴木 浮葉
 黄落の道かさこそと杖の先立 川 鈴木かずえ
 痛みとは生きてる証年用意小 平 鈴木 寿江
 注射器を睨む利かん気林檎赤小金井 鈴木 佑子
 マスク越し新書サイズのホラを吹く町 田 栖村 舞
 油絵に描かる神話山眠る板 橋 諏訪部典子
 慎重に上書保存十二月小 平 関 梓
 白鳥が白鳥を呼ぶ遺句集調 布 芹沢 愛子
 人の罪かな四季は二つに秋の声小 平 高瀬多佳子
 是非もなく喋る建前室の花中 野 小鳥遊 彬
 着脹れて旅に出るがにポストまで 西東京 高原 桐
 水澄むや働き者といふ弔辞清 瀬 谷村 鯛夢
 オリーブの実です苗字が欲しいです 国分寺 玉井 豊
 カラマツと青空一体一服の秋稲 城 玉木 康博
 もういいよなんて言うなよ種茄子 日 野 玉木 祐

あけぼの集

ガーシューイン主役の冬のラグタイム三 鷹田山 光起
 頁繰るたびに銀河へ近づきぬ 武蔵野 津久井紀代
 冬満月極の君は身じろがず八王子辻 升人
 大晦日平和を願う大合唱八王子都筑 遊
 晩秋の風のたはむる一揆の碑東村山寺尾 令子
 満目のすすき満腔なる愁思中 野堇^{もろ} 振華
 三面鏡の一面は雪我が九十立 川遠山 陽子
 尽きるまで己を尽くす冬紅葉西東京戸川 晟
 採るよりも転がるばかり零余子かな杉 並飛永百合子
 越後路や山を傾げて白鳥来平 塚富山ゆたか
 印鑑に白息をかけ訂正す清 瀬永井 潮
 枯葉舞う鈍色の空鳥飛べ立 川中條 啓子
 冬銀河悲しからずや地に戦西東京中田とも子
 雪晴れてあの森の木が椅子になる府 中中矢 温
 願ひごとと只一つなり初詣国 立中野 淑子
 曼珠沙華明るい蒼い空が好き座 間長野 保代
 湿拓の噴霧凍つく墓仕舞ひ武蔵野夏目 重美
 万愚節嘘のつけない鏡かな町 田成戸 寿彦

焼鳥の串引く口も美^はしき人国分寺南行ひかる
 旅果ての埠頭に仰ぐ大聖樹(函館) 西東京西川 五月
 宅建合格と知らせ来る子や小春風世田谷西前 千恵
 セキレイや石川酒造裏広し昭 島西村 智治
 吐く息の早や白じろと冬隣り三 鷹拔山 裕子
 満月を見上げ味わう平和かな三 鷹根岸 敏三
 玄関の靴をそろへよ神送三 鷹根岸 操
 「ひゃつとしますよ」平和な国の心電図小 平野口 佐稔
 縄巻きの蟹生き返る天気雨八王子野澤 勝美
 未来まだある雪解けの松零青 梅萩原 美沙
 控え目な春をそうと手繰り寄せ武蔵野蓮見 順子
 わが影とゆきあう夕焼け跨線橋武蔵野蓮見 徳郎
 一輪は刃のごとし水仙花多 摩平山 道子
 柚子の黄や壮士敗れるとも絞る八王子広井 和之
 長州屋おぬしも悪よの河豚^{ふぐ}魚汁練 馬淵田 芥門
 冬銀河生まれる前の地平線国 立前田 弘
 レンタルのお店で終わった七五三国 立前田 光枝
 陶枕に氷を入れて祖母吐息木更津松本 まり

あけぼの集

葉牡丹や吉凶の日々巻き込んで 八王子 松元 峯子
 冬の朝屈伸するも自虐的 東久留米 三池 泉
 淋しさが重なり籠もる立冬よ 東久留米 三池しみず
 晩秋や奈良の土産に筆と墨 東久留米 三浦 禎三
 生きてゐてよかつたけふの初日の出 小金井 三浦 土火
 死ののちの夫のむすうや大西日 世田谷 三浦 文子
 鶏頭は憤怒の花と見ておりぬ 町 田 三木 冬子
 ものがみなまあるくかわき小春の日 国分寺 水落 清子
 凍轍父の語りし俘虜の日々 三 鷹 水野 星闇
 燥ぐ子のすくと眠り十三夜日 野 満田 光生
 無心とはただ歩くこと春の尾根 昭 島 宮腰 秀子
 シナリオを捨てていよいよ冬の蝶 調 布 宮崎 斗士
 大根の下手な輪切りや昼の月 国分寺 武藤 幹
 また一錠薬増えたり花八手 小金井 村井 一枝
 赤血球地産の葱に地の力熱 海 望月 哲土
 衣擦れの音折りたたみ納棺す 東村山 森本由美子
 人体は水面でありぬ星月夜 三 鷹 守谷 茂泰
 紅葉真つ赤空気がかたくなつて来る 町 田 山崎せつ子

花木權父の終章無色なり 東村山 山崎美紗緒
 晩秋や誌上の友の名を探す 府 中 山本 徳子
 宅急便義兄^{あに}の形見の冬野菜 八王子 山本ひまわり
 幾秋や一汁一葉多摩に老ゆ多 摩 山本みつし
 地球より異星の友へ年賀状 調 布 豊 宣光
 三隣亡という日渋谷は初しぐれ 稲 城 好井 由江
 川二つ渡りて秋の野に出でぬ 三 鷹 吉川 真実
 灯台は男の烽火 雪^{ゆき} 雷府^{がんろう} 中 吉澤 利枝
 冬空や右脳を活かす俳句かな 東久留米 吉平たもつ
 冬ざるるものの一つに風の音 国 立 吉村春風子
 身にしむや診察券がまたひとつ 町 田 米倉 信山
 ふかふかの猫の背中や小六月 立 川 米澤 久子
 猿麻^{さるおがせ}棒^{ぼう}ずり落ち眠る春浅し 青 梅 渡部 洋一

◇前号で芹沢愛子さんの句に誤記がありました。お詫びして
 訂正させていただきます。

穴・惑い決心だけは何度もする 調 布 芹沢 愛子

赤野 四羽

曼殊沙華この道行くの疲れるわ

鈴木 祐子

「この道しかない」と選択肢を限定しようとするのが悪政の常である。そこででんだか疲れる、おかしいなと気付くことが大切だ。諧謔的であるが、実際には人の生死がかかっている。曼殊沙華が警告しているのだ。

足立喜美子

夕顔の一難去って源氏かな

大友 恭子

五条の借家に身を隠していた時に源氏と出会い、源氏に誘われて荒廃した某院に移ったところで物の怪に取り憑かれて死んだ夕顔。彼女の急死は愛の崩壊を現実化した。寄る辺のないさすらいの人生を象徴する「夕顔の花」。夕闇に白く浮かんでいる。

穴原 達治

ノラ猫の一瞥まるで解夏の僧

佐藤 実

解夏の僧というのは夏安居が明けた修行僧のこと。旧暦の七月十五日、真夏の修業明けである。野良猫がこちらの存在などは毛ほどにも気にしていない様子は太々しいが悟りきった僧に置き換えた。これが返って滑稽でもある。良句と受け取りました。

新井 温子

水澄むや終活準備遅々として

大槻 正茂

終活という言葉が頭の隅にいつもあるがなかなか進まない。思い出は年とともに濃くなってゆき頭から離れてゆくことは少ない。身辺がすっきりすれば、日常もより楽にまた便利になるとは思うけれども。作者の気持ちがよく分かる一句です。

荒川勢津子

あじさいに私雨の降る夜かな

安西 篤

あじさいは、程の良い湿り気が有って、美しい彩に咲く。私雨は局地的に降るにわか雨のこと。思いにふける夜、折しもの雨にあじさいの濡れるのを想う——。

有坂 花野

残り香に少しの酸味夏の恋

望月 哲土

夏の恋は大概終わるものらしい。だからこそ甘酸っぱい夢物語が尾を曳く。それでもいいさ、少しぼつとしていた作者。読む方も多少うらやみながら、なぜか安堵する。この恋は実は一行の俳句という十七文字の中に膨大な心の物語を秘めているのだ。

飯田 玉記

みんなや母との会話繋がらず

満田 光生

老いて耳が遠くなられたであろうお母様との会話。なかなか話が成立しない。それでも話しかける作者の優しさが下五に想われて、ほほえましい。きつと仲の良い母子なのでしょう。

石川 春鬼

白玉や被爆の父は帽子好き

佐藤 栄子

子どもの頃、夏のおやつは母の手作りの白玉が一番好きだった。甘い蜜の掛かった冷たい白玉を自分で作れば、家族の面影が浮かんでくる。父が帽子好きだったのは、被爆で負った頭部の傷を隠すためだったのかも知れない。

一ノ瀬順子

緑蔭や思ひ思ひの指定席

秋山ふみ子

涼風が吹きぬける公園に、いつものメンパーが集まって来る。ベンチに腰掛ける位置も自然と決まって来る。戦争の報が続く日々に静かな時間が流れている。この日常の一コマに平穏である事の幸を感じるのである。

伊東 類

葡萄育つ言葉のひとつづつ増やし

津久井紀代

葡萄に限らず何かが成長していく過程を見るのは実に楽しい。自分も共に成長させてくれるような心地になる。かわいいら徐々にもっと大きくなあれ、美味しくなあれと掛ける言葉の変化が果実の成育を一層促す。同時に作家としての成長でもある。

大井 恒行

朝空を見上げる習い敗戦忌

野口 佐稔

日々、毎日、朝の空を見上げるのが習慣になっている。今日は八月十五日、昭和二十年、この日は日本にとって特別な日。歳時記的には「終戦日」や「終戦忌」の選択肢があるが作者は「敗戦忌」を選んだ。生きていく上での姿勢、態度が表されている。

尾崎 太郎

放牧の牛の眼にある秋の雲

萩原 美沙

広々とした放牧地に散らばる牛の群れ、晴れた秋の昼間、目に浮かぶのがそんな風景です。牛が雲を見る、のではなく、「眼にある」という。うまい表現だと思いました。実際、牛の眼に雲が映っているのかも。とても伸びやかな気持ちになりました。

大槻 正成

ロボットに運ばれてきて生ビール

米澤 久子

機械が進歩したのか人手不足なのか、ロボットが注文した品を運んで来てくれます。品物を取り終ったら「ボタンを押して下さい」など話したりもします。米澤久子さんの句は下五が「生ビール」なのが具体的でいいと思いました。作者酒好きなのかな？

岡崎たかね

憲法九条母ていねいに柿を剥く

宮崎 斗士

戦争になると市民の日常はどうなるか、ガザの地獄をテレビが刻々と伝えます。日本は軍事基地を抱えつつも徴兵なし、武器開発、輸出を抑え「日本は攻めない」のメッセージを送り続けている。九条こそ最強の抑止力。国民の生命、財産は守られています。

神崎 幸子

夏山に雲湧き出づる露天風呂

三浦 禎三

幸せな非日常の光景。ゆっくりとま昼の温泉で露天風呂に入り、雲と湯気が一瞬にして自分の人生を交差して行くさま、これからの人生の歩む道を、しっかりと考えたいらっしゃる方でしょう。雲と湯気のとらえ方が素晴らしい一句となっています。

城内 明子

残り香に少しの酸味夏の恋

望月 哲士

気意いシャッソンの調べにロゼワイン。熟年の、熟練の、ひと夏のゆとりある恋なのでしょいか？「少しの酸味」の措辞が、読者の心と想像を揺らします。「恋」の文字を忘れていた我が身には眩くも遠い遠い情景。

佐藤 栄子

角のなき消しゴム一つ処暑の風

石川 春兔

狭い行間の文字を消すには、やはり消しゴムに角があった方がよい。ましてや急いでいる時などは尚更。焦りで汗ばむ事もある。消しゴムから「処暑の風」の取り合わせが妙だ。

佐藤 光子

みんなや母との会話繋がらず

満田 光生

会話は繋がらなくてもいいのです。手を握り、お母さんに話しかけ続けて下さい。死後も耳は二十分間こえているそうです。

柴 れいこ

風の盆なべて八尾は坂の町

寺尾 令子

以前より一度は訪れてみたいと思っていた越中富山の風の盆。まさしく坂の町。胡弓の音が遠くから近づいて来る。独特の踊りの列が来る。どこからやって来るのだろう。その様子を詠むより「坂の町」と言い切ったことに情景の緊張感が感じられた。

島 彩可

あじさいに私雨の降る夜かな

安西 篤

あじさいに慈しみの雨が降り注ぐ静かな夜を平明に詠まれている。

本当に必要とされるものをタイミング良く差し伸べることは難しい。配慮不足や余計なお節介に明け暮れている我が身と思う時、私雨の優しさが心に染みて来る。

下田 峰雄

さるすべり戦中派われ生きるかな

岡崎 万寿

私も九十歳を過ぎ、少年時代は大方、太平洋戦争の渦中にあつたが、日本の平和の世は仕絶な戦争の犠牲の上に成り立っている。私達はこの事を決して忘れてはいけない。作者はご高齢と拝察しますが、戦争の語り部としてのこの作品に敬意を表します。

鈴木かずえ

夏月の桑畑へ逃げた爆撃

玉木 祐

第二次世界大戦。あの頃はどこも養蚕が盛んで村の廻りは桑畑に囲まれていた。空襲も激しくなり桑畑に逃げた。恐怖心に震えた記憶は忘れられない。私も作者と同じ様な経験をした年代で戦争は絶対にしてはいけない。美しい月の平和を祈りたい。

高原 桐

鰯雲一緒に流れていきましよう

大西 恵

結句がやさしく呼び掛けるようで、「はいご一緒致しましょう」と応えたくなる。静かな美しい鰯雲に出会うと暫く立ち尽くして眺めているが、この様に誰かに語りかけたいものである。鰯雲の形容は一語もないが天高く静かな鰯雲が目に見えて来る。

谷村 鯛夢

はんなりと聞き返されてコールドコーヒー

幸村睦子

五十年前、京都の貧乏学生だった頃、コールドコーヒーはよく聞いた。アイスコーヒーのことで、コールドの下が抜けた形。この言い方、生きていたのか。大阪はレーコ（冷コーヒー）が多かったかな。上五からの字余りに関東人の戸惑いが。うまい。

玉木 康博

残菊美し末は炎となる身かな

松元 峯子

凛とした句です。この残菊は白い菊と思います。花の終わり近くでも、まだまだ白き菊。ただ潔く、真っ赤になつて最後を上げるだろう様に命を感じさせます。

玉木 祐

診断は加齢白桃が眩しい

城内 明子

齢を取って医師に診てもらうと、まず加齢と軽いなされる。昔の医師は話を聞きながら顔色を観察、診察を行った。今はまず検査、カルテもなく、PCばかり見ている。そんな状況を皮肉を込めて破調で詠う。最後に救われる、白桃の瑞々しい眩しさ。

都築 遊

今八十路当時六歳敗戦日

中田とも子

焦土となつた故郷は、幼い少女の眼にどう映つたのだろうか。人は生まれる時代や生まれる場所を選ぶことができない。そうした制約のもとで、少女はこれまで生き続けてきた。少女が体験してきた人生の重みを深く感じつつ鑑賞した一句である。

戸川 晟

雲の峰今少年になるところ

前田 光枝

自我が少し芽生えて天真爛漫さが後退し影のようなものが大人びた容貌に現れる。それと並行して声変わりして声が思うようにならない。こんなところが少年になる頃の兆候だろうか。思い出してみると夏休みの頃で、立ち上がっていた雲の峰が象徴的。

中野 淑子

優しさは強さでもある秋桜

飯田 玉記

人の手に依らない野に咲く秋桜の景を詠まれたもので、私達への訓えでもあるように感じた。柔軟な美しさと強風にも耐える強さを持つ賢母を想像させる。秋桜の季語がしっかりと納まってゆるぎない。

長野 保代

立秋の風まだ熱をはらみけり

豊 宣光

八月八日頃立秋となりますが炎暑は厳しく、学校仕事場も夏休み、夏の印象が強い。中七から下五の措辞がすばらしい。風が熱をはらんだ景、自分が楽しいときは風が弾んでいるように感じられたのでしょうか。

拔山 裕子

あじさいに私雨の降る夜かな

安西 篤

静かな雨の音が俄に耳を打ってきた初秋の夜。先程まで夕陽に照らされて、あえかな色の移ろいに心を和ませていた作者。あじさいは、雨に打たれて今は何色だろうか。明日は、何色の日が作者を待っているだろうか。

野澤 勝美

荒梅雨の真夜の自販機あかりかな

富山ゆたか

日常生活に内在する対象の有り様を手際良く描写しています。梅雨末期の激しい大雨に直面し、これまで、ややもすれば同じ場所で色々と思われてきた自販機を考え直されたようです。真夜中の暗黒に際しては、自販機といえども明りは有難いものです。

根岸 敏三

放牧の牛の眼にある秋の雲

萩原 美沙

牛の両目の間隔は広く、頭の横側についている為視野が広く、三百三十度の広角に見ているそうです。牧場で放牧されている牛は、さぞ広い景色を見ていることですね。この句の「秋の雲」がいいです。

広井 和之

幻聴のオオシマゼミは好色か

大井 恒行

「幻聴の」で不意を衝かれ、「好色か」と畳みかけられた。虚実の間になんとも生々しい生命観が現前する。圧倒された。雄の「オオシマゼミ」の鳥に似たという鳴き声、地中に約六年、羽化後約一週間で交尾を急ぐ蟬の生態を、自分に引き付けて読む。

前田 弘

走り根の横に蟬穴並びおり

根岸 敏三

古木の根が地上を走るように伸びている。うっかりすると、爪先をとられそうになる。中には一跨ぎして腰を下ろしたくなるものもある。しかし作者の眼は走り根に並ぶ蟬の穴に釘付けになる。凡人には見えない蟬の穴。素直だが俳人ならではの眼力に感服。

松本 まり

今朝の秋猫は活字を覆ひ伏す

広井 和之

猫を長年飼っていると、主が熱中している物に少し、妬けるのだろうか。必ず、ゴロンと、遊んで下さいな。こちらを見てくださいな。新聞を広げると必ず、言わんばかりにそうします。折しも立秋の朝。猫の生態の一コマを際立たせている。秀句。

松元 峯子

人に生まれゴリラに生まれ露けしや

江中 真弓

自分の意志で、人間に、ゴリラにと、生まれて来た訳ではない。冬に向かう季節、人間は、戦争や、厳しい社会情勢に、ゴリラは、厳しい自然環境に立ち向かい、それぞれ懸命に生きている。何と、いじらしく、涙ぐましい事であるうか。共感です。

三浦 文子

火曜日に会うて土曜日銀河の尾

足立喜美子

「火曜日に会うて土曜日」というフレーズに心がひきつけられた。銀河から外に向かつて流れます美しい火の玉を手がかりに読ませていただいた。急逝された方を追悼されての御句であろうか。余韻の哀しさに感銘した。

三木 冬子

デイ三時散策に出る蟬しぐれ

鈴木かずえ

高齢化社会になってデイサービスの利用が一般的になっています。初句、デイ三時は俳句ならではの省略の表現で新しい。ほぼ室内で皆と楽しく過ごし三時に散策に出るというスケジュール。この日折りしも蟬しぐれのまつた中で、心洗われる一句。

満田 光生

熱帯夜嗤つたやうに金魚の眼

稲吉 豊

寝苦しい夜、水槽の金魚と目が合い、嘲笑われたように感じる。水中の涼と室内の暑。「嗤つてゐたる」だと機知の句に過ぎないが、「嗤つたやうに」で優れた心理詠となった。季重なりだが、季語の相乗効果で表現の幅を広げた稀有な句だ。

宮腰 秀子

優しさは強さでもある秋桜

飯田 玉記

そうですねーと頷いてしまった。若い時はなかなか気付かなかったことが年齢を重ねていくうち、本当の人間の強さや優しさを知ることができた、と作者は感じたのでしょう。コスモスの白、ピンク、黄色の花が風にやさしく揺れている。共感の句です。

森本由美子

赤蜻蛉しばらく付いてくる気配

平山 道子

沢の草がおう。目の高さにとまっている赤蜻蛉。しばらく蜻蛉の目の中にいる自分。沢を離れ歩き出す。後ろからついてきているかもしれない、心に止めたひとときの回合の余韻を感じます。

渡部 洋一

今八十路当時六歳敗戦日

中田とも子

敗戦日が七十八年を迎えた。この時代を少しでも記憶に残っている人々も八十路を超えつつある。私も当時四歳であった。俳句で八月十五日と言えば、季語としての敗戦日を意味するけれど、歴史の中で徐々に風化して行くのが残念である。

あけぼの便り

○昨年十一月に発表された「おーいお茶新俳句大賞」(伊藤園)の各部門大賞の鑑賞文を「自由語り」(伊藤園)に書きましたので機会あればお読み下さい。

(安西 篤)

○前号の拙句「夫婦という漸近線や半夏生」をご鑑賞下さいました西村智治様、有難うございました。ウクライナの惨状、イスラエル人の人質は解放されず、ガザ地区への爆撃。きな臭さの中、明日何があってもおかしくないと思えば、連れ合にも少し優しくしてもいいのかなんて思っているこの頃です。(石橋いろり)

○前号で拙句をご鑑賞頂きました青木様、

鈴木寿江様、諏訪部様、ありがとうございます。
いました。これからの励みに致します。

○投稿などネットで出来ませんか。
(一ノ瀬順子)

○来年の二月の寒さが思いやられます。そ
ちらの皆さんもご用心を!! (伊東 類)

○十一月の連休に大山詣でのハイクに出か
けました。ケーブルカーで阿夫利神社ま
で、大勢の人が登ります。高尾山程度の
らくちん登山を想定しましたが石段の急
登にほぼ降参、やっと頂上へ。帰途の女
坂も石段の急坂に泣きました。脚力の衰
えを感じ古人の健脚を思いました。

(亀津ひのと)
○本誌で高野公一さんのご逝去の報を知り
驚きました。氏の質の高い分かり易い俳
句に多大な期待をしていただけに未来の
俳句のために残念でなりません。

(川島 一夫)
○おだやかな小春日和の日本、でもイスラ
エルやパレスチナの戦には言葉もありま
せん。決してまじわることのない国同士
の争い、悲しいことです。何もできず
ニュースに胸がふさがれます。

(佐々木克子)
○満田さん、「百合の香や柩の母への手

紙」。ご愁傷さまでした。沢山句を詠ま
れお母様はお喜びのことと思います。高
野公一さんは、私と同じ上越のご出身、
とても残念です。
(佐藤光子)

○地域活性化の一環で河原に繁茂してい
る葛の蔓を大人たちが丸めて輪っかを沢山
作りました。杉の葉、松ぼっくり、どん
ぐり、鈴懸の実などを採集、拾い集め用
意して一人二つずつクリスマスリースを
作って頂きました。皆笑顔でした。

(清水弘一)
○この頃の病院は繋がりが悪く検査中に悪
化しそうです。病院に限らずお医者様も
淡泊で人情味ゼロです。俳句は昭和のよ
き頃を思い出させてくれて有りがたく、
病の間も触れられて有難く思いまし
た。
(高原桐)

○ついこの間まで半袖だったのに急にコー
トの出番、何ともこの気候にはお上手い
です。地球の崩壊のきざし? 変な世の中
です。どうぞお元気で。
(玉木祐)

○急に寒くなってストーブを出したり炬燵
布団を厚いのに替えたり冬支度が大変で
す。何よりも体調に気を遣いますね、
(飛永百合子)

○第41回俳句大会に拙句「きりんの首揺れ
てきりん語春の風」をお選び下さり誠に

有難うございました。当日は白内障手術
のために出席できず残念でしたが今後の
励みになります。
(成戸寿彦)

○秋はまだかと思っているうちに真冬なみ
の寒さについて行けずに困っています。
でも何とか頑張らねば! これからも宜し
くご指導下さいます様に。
(西前千恵)

○俳句大会無事に終わりました。大井恒行
先生をはじめ来賓の先生方、ご参加の皆
様、ありがとうございます。

(根岸敏三)
○あけぼの148号に拙句を鑑賞して下
さった中田とも子様、水落清子様、あり
がとうございました。毎日を精一杯生き
ましょう。
(根岸操)

○有力会員逝去の記事や追悼に、人の世の
無常を果無んでしまいが、詮無き事と諦
観。終活に日々耽溺せず俳句三昧がい
い。さて「在宅句会」が終了した。実に
十数年、優に四百を超える駄句に貴重な
批評と評釈を賜った。永井様はじめ諸先
輩評者雅兄に頓首して御礼申し上げます。

(淵田芥門)
○猛暑も過ぎ去り十一月に入り二十五度以
上の暖かい日が続きます。月の輪熊が町
田市にも出現したとTVの報道を見て驚
いています。森のどんぐり等の食料が暑

第9回 俳句研究会

9月9日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 戸川晟・秋山ふみ子・

玉木康博・大森敦夫・根岸操・

石原俊彦・根岸敏三

参加者22名

★講話……大石雄鬼氏「直喩はだめなのか?—阿部青鞋作品から—」

晩年の我慢と頑固やつと秋 戸川 晟
うつせみのふかれて長き聖橋 淵田 芥門
一口に木曾の秋なり栗きんとん 亀津ひのとり
孫の手の届かぬ痒み台風圏 石橋いろり
爽やかや下書き終えし遺言書 森本由美子
カンナよく咲いたよ母の葉書なり 満田 光生
こんやくのやうな日ざしにカンナ咲く 大石 雄鬼
再発を告げる笑顔の目に秋思 山本ひまわり
ちぐはぐな心模様やつつくし 秋山ふみ子
猛暑日の悪口を言う立ち話 松元 峯子
無為の日の思ひも秋の風にかな 吉村春風子
優しさは強さでもある秋桜 飯田 玉記
弧を描く3点シュート鷹渡る 青木 隆
地芝居や二三来たりてまた去りて 大森 敦夫
病棟の窓に青空あきあかね 三浦 土火
多機能を押せど届かぬ流れ星 石原 俊彦
葉の裏で何やら不穩葛の花 尾崎 太郎
夕焼や遠望の富士黒黒と 根岸 操

寒さ厳しくなつてまいりますどうぞお身体大切になさってください。(宮腰秀子)

○いつもお世話になっております。過日の多摩地区俳句大会に出席しました。大井恒行講師の講演はとてもよかったです!!

○成戸寿彦様、武藤幹様、前号にて拙句お採り上げ戴き真に有難うございました。ご鑑賞拝読嬉しく存じました。

○編集部の皆様、いつもお世話様でございます。これからが冬本番です。くれぐれもご自愛くださいませ。(好井由江)

○いつもお世話になっております。この秋は夏のような暑さから真冬の寒さへとジェットコースターのような気温の高低の激しさに右往左往するうちに気がついてたら年末という印象です。寒暖差の大きい季節どうぞご自愛くださいませ。

○多摩地区の俳句大会に初めて参加させていただき、勉強となりました。少しずつ参加させていただきます。(米倉信山)

○青村萌生様、尾崎太郎様、拙句を取り上げご鑑賞いただきありがとうございます。今後の句作の励みになります。今後ともご指導下さい。(渡部洋一)

さのため実をつけないのでしょうか。迫りくる冬眠のため焦っているのでしょうか。どうぞ感染症にも油断なくお過ごしくださいませ様に。(松本まり)

○稲吉豊様、前号にて拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。嬉しく元気を頂きました。(松元峯子)

○先の見えない国内外の世情。地球環境も心配。新しい年はどうなるのでしょうか。後期高齢者の自分は明日よりも若いのだからと言ひ聞かせ、今の今をがんばるしかない……。(三木冬子)

○「在宅句会」では長い間お世話になりました。ありがとうございます。担当スタッフの皆様お疲れ様でした。おひとりおひとりにお礼を申し上げます。

(水落清子)

○連日の戦火の報道に胸が痛みます。ウクライナの句と比べ中東の句はあまり見かけません。善悪を見極め難いからでしょうか。正義とか悪とかは所詮主観にすぎず、日々死体の山が築かれていることこそが問題です。リアリズムの文学である俳句はこれを是非詠むべきではないかと日々考えています。(満田光生)

○役員の皆様、いつもお世話になっております。ありがとうございます。いよいよ

人間なんて煙たいたけさ火吹竹 辻 升人
コスモスらバスに手を振る信州路 玉木 康博
街道の裏道瓢箪の実のたわわ 西前 千恵
秋初め白鷺一羽餌を捕ふ 根岸 敏三

第11回 俳句研究会

11月25日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・
玉木康博・小山健介・

満田光生・石橋いろり・
山本ひまわり

参加者25名

★講話……董 振華氏

「中国の物差しと日本の物差し」

石段の残り見上ぐる七五三 稲吉 豊
老婆引く老犬の黙冬木立 石原 俊彦
冬ざるものの一つに風の音 吉村春風子
尽きるまで己をつくす冬紅葉 戸川 晟
鳴^{かいつぶり} かほ出す方を見て暮るる 根岸 操
老いてなお家事實物や秋刀魚焼く 松元 峯子
冬さくらさみしい時は泣けばいい 佐々木克子
星空へ手締め的一本西の市 中田 瑛子
秋深し病が変えた人生観 飯田 玉記
錦秋を淑女前こぐタンデム車 野口 佐稔
一葉忌洗濯物のよく乾く 満田 光生
鼻唄の八百屋の主人小六月 青木 隆

石路の黄になぐさめられている朝^{あした} 山崎せつ子
黙禱のあととさよなら冬桜 三浦 土火
足元に冬が来てゐる秋葉原 大森 敦夫
解体の廃材に降る木の葉かな 秋山ふみ子
廃屋の三羽の烏冬日没る 山本ひまわり
不得意なものに運針一葉忌 小山 健介
綿虫の打者の顔にまといつく 根岸 敏三
愛猫と居て言葉要らない冬の宵 小鳥遊 彬
小夜時雨ドアホン越しの回覧板 石橋いろり
よもつへに入りにし者と櫓明り 水野 星閣
小鳥は巢に龍の玉は手のひらに 董 振華
集金人より大きな柚子をいただけり 西前 千恵
独酌亭小三治の銘あり燗酒のむ 玉木 康博

初夏の吟行会(予告)

新東京百景に選ばれた北山公園(菖蒲苑)と、都に二つしかない国宝建造物の一つ正福寺をめぐる予定です。千体地藏尊とも呼ばれる正福寺は室町中期に建立され、鎌倉の円覚寺を彷彿とさせます。駅から公園までは、菖蒲まつりの幟が誘ってくれ、長閑な道が続き、狭山丘陵を背にした菖蒲苑には、300種8千株10万本の花菖蒲が咲き誇ります。

令和6年6月1日(土)

東村山駅西口改札10時30分集合

秋の吟行会

江戸東京たてもの園

令和五年十月七日

すっきりと晴れ渡った秋天と心地よい風。思わずピーカンという学生時代の言葉思い出した。まさに絶好の吟行日和。武蔵小金井駅から快速歩行二十分少々で小金井公園へ。ずいぶん昔の花見の記憶が蘇る。

改修中のたてもの園入り口両脇に金木犀の巨樹、入園第一歩赤と黒の実をつけたゴンズイが目を引く。コスモスに秋蝶が群れて風に吹かれるまま、これで一句出るだろうな。林を歩くと団栗が降って来て頭を打ち、ベンチに当たって大きな音。

展示コースで最初に目にした大きな屋敷に入る、何と旧高橋は清邸。二階に上ると「不忘念」の掛軸、ここでこの書に出会うとは。二二六事件で暗殺された気骨の経済宰相、一句を詠めるかな。

更に林の奥へ進むと、古く懐かしい商店が立ち並ぶ下町中通り。乾物屋のスルメ、昆布、鰹節が在りし日のまま整然と並ぶ。武居三省堂の洒落た建物、商品の筆や硯も良いな、これらも句の素材とメモ。傘屋、醤油屋、荒物屋など昭和の香り。奥の銭湯

「子宝湯」は時間切れで覗けず。

いつも吟行で対象を絞り切れず、時間切れで七転八倒する私、今回も然り。何とか投句を終えて、一旦武蔵小金井駅に戻り南口の句会場の萌え木ホールへ歩く。皆さんの句を選句しつつ吟行経験に乏しい小生には、瞬時に題材を絞り込み俳句の言葉に昇華させる訓練不足を痛感する。今回の吟行には「からまつ」と「山河」から七名の方が参加されて合計二十五名の句会でした。吟行担当幹事の皆さま、多謝あるのみ。

(亀津ひのとり記)

秋の吟行会作品

〈上位入選七句〉

原っぱに土管もありて秋の空 尾崎 太郎
どんぐりやわれも落下の途中にて 亀津ひのとり
発車ベル鳴らせ都電よ菊日和 青木 隆
秋麗や世を見つづけし古交番 根岸 敏三
秋草や風のまにまにむかしの香 秋山ふみ子
黒塗りのりやカー色なき風の中 石川 春兎
昭和長屋やかん卓袱台秋団扇 南行ひかる

〈一人一句〉

団栗に肩をたたかれ五輪塔	西前 千恵
秋高し少子の課題子宝湯	戸川 晟
ポマードと鉢巻義兄の秋祭	山本ひまわり
經節の品定めする暮の秋	森本由美子
銭湯の暖簾を潜る秋の風	桜井万希子
青銅の看板建築秋澄めり	山口 萌黄
秋の声ゴルデンバットに火を点す	多田 文代
秋蝶乱舞黄花コスモス戦ぐ毎	三浦 土火
は清郎せせらぎの辺に杜鵑草	根岸 操
稽田の農夫二人の立話	池田 麻衣
ペンキ絵の舟滑らかに秋の湖	満田 光生
木の葉降るラムネとよちゃん令和にも	石橋いろり
吹き抜けに未来たくせば天高し	小野こうふう
小鳥鳴くここにありしやおもちゃ箱	大森 敦夫
八十八のボランテアとて花手入れ	池田 忠子
たてももの園色なき風のいい心地	石原 俊彦
人間を裸にしては草枯るる	大石 雄鬼
天高し大名屋敷と黒松と	押見 淑子



江戸東京たてもの園吟行会

第41回東京多摩地区現代俳句協会俳句大会

秋日和の十月二十九日、武蔵野スイン

グホールにて六十四名が俳句という共通言語を楽しんだ。本日講演演題の高屋窓秋「頭の中で白い夏野となつてゐる」の色紙や講師著書を展示。俳句大会は広報の満田光生幹事の司会から二時にスタート。恒例の会歌「多摩のあけぼの」を小山健介・根岸操・水野星闇・秋山ふみ子氏のリードで三番まで斉唱。根岸敏三副会長の開会の言葉、吉村春風子会長の挨拶につづき、高橋宗史千葉県協副会長、田畑ヒロ子神奈川県協副会長、長谷川はるか都区協事務局長よりご祝辞をいただいた。

現俳オーブンカレッジ講師の大井恒行先生（「豈」の編集）による「高屋窓秋について」の講演が始まる。全身黒のダンディないでたちで新興俳句の旗手窓秋作品について熱く語っていただいた。配布資料に、高屋窓秋句集『花の悲歌』推敲後の異同があり、原句●と改稿された句○が五十句程掲載され、窓秋の作品数の少ないこと、その分句を丁寧推敲したなどの背景もあり、実際の推敲句から

その効果を共感できた。

●桃源へゆく雲のみち春の花

↓○ ……雲のみち春の泥

終盤、窓秋の生音源のテープを、雑味があったにしろ聞くことができた。質疑応答も盛り上がり、時間延長しての講演となった。

俳句大会は、既に互選により決定した上位三十位までの入賞作品を発表。俳句大会賞は十二点獲得の蓮見徳郎氏の「吾輩は何だつたのか漱石忌」。賞状・賞品が授与された。二十四名の特別選者による特選賞を発表。直接、選者から賞品が手渡された。その後、特別選者のご講評をいただいた。

本部、地区協、各部からの連絡事項のあと、戸川晟副会長から「毎月の立川の研究会にもご参加いただきたい」という一言にて閉会。

マスクをとった笑顔の集合写真が水野星闇氏（監査）の一眼レフに収められた。尚、大会の模様は、大井恒行先生のブログ「日日彼是」に翌日アップいただいている。（石橋いろり記）



第41回俳句大会 入賞作品

〈大会賞〉

吾輩は何だったのか漱石忌

蓮見 徳郎

〈上位入賞句〉

抱けそうな月が出ていて帰れない
 全席が自由席です仏の座
 桑田 典三
 噴水はもう噴水にあきている
 前田 光枝
 新涼やコップの中に水平線
 飛永百合子
 膝に来る柿の固さの男の子
 関戸 信治
 天瓜粉打たれ無邪気な母となる
 永井 潮
 自由とは孤独でもあり冬鴉
 宮腰 秀子
 合歓咲いて朝から時間やわらかい
 山崎せつ子
 向日葵の迷路を刈れば空ばかり
 栗原かつ代

〈大会選者の特選句〉

大井 恒行 選
 陽炎が輪郭になる国家かな
 山本 敏倅
 高橋 宗史 選
 逢いたいと言う無花果に陽のぬくみ
 大井 恒行

田畑ヒロ子 選

天国に多くの友人星月夜
 松元 峯子

長谷川はるか 選

人生の付箋ばかりがいわし雲
 今野 龍二

安西 篤 選

震災忌未来はいつもつくられる
 川崎 果連

前田 弘 選

話そつよトマトは青いままだけど
 玉井 豊

遠山 陽子 選

踏青やされど戦車の轍かな
 桑田 制三

冬木 喬 選

帰省子に父母あり土の匂ひあり
 増田 信雄

三池 泉 選

吾輩は何だったのか漱石忌
 蓮見 徳郎

三浦 土火 選

天瓜粉打たれ無邪気な母となる
 永井 潮

江中 真弓 選

農を捨て東京で茄子育てをり
 谷川 治

吉村春風子 選

食卓の西瓜の値上げにある戦争
 野口 佐稔

根岸 敏三 選

自転車で茶菓子の届く西瓜小屋
 大森 敦夫

永井 潮 選

まだ紙を知らぬ鋏や渡り鳥
 西野 奏子

山崎せつ子 選

水を打つ風の違いを感じつつ
 川島由美子

戸川 晟 選

全席が自由席です仏の座
 桑田 制三

小山 健介 選

風の盆手のひら宇宙と交信す
 田畑ヒロ子

根岸 操 選

少し休む勇気のあれば樅の花
 石橋いろり

蓮見 徳郎 選

蚕豆やとほき日暮れのにほひ立つ
 淵田 芥門

水野 星闇 選

春立つや妻逝きし日はカレンの忌
 満田 光生

佐々木克子 選

種袋振れば未来の音がする
 國分 三徳

津久井紀代 選

天瓜粉打たれ無邪気な母となる
 永井 潮

石橋いろり 選

決心は一日ひと日の蛍草
 根岸 操

大森 敦夫 選

膝に来る柿の固さの男の子
 関戸 信治



吉村会長挨拶



(上) 大会賞の蓮見徳郎さんと吉村会長
(下) 来賓の左から都区協・長谷川氏、神奈川県協・田畑氏、
千葉県協・高橋氏



大会終了後の記念撮影

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(意見幹事担当)
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★令和六年度定時総会 並びに陽春句会

日時 令和6年3月23日(土) 午後2時
会場 武蔵野シンクホール

出句締切 2月22日(木)
(詳細は別紙をご覧ください。)

★初夏の吟行会

日時 令和6年6月1日(土)
場所 正福寺と北山公園(東村山市)
(詳細は次号でお知らせします。)

★会員の現況(12月末現在)

223名(正会員180名・一般会員43名)
☆新入会員 3名(敬称略) *印は正会員
☆有原雅香(狛江市) *後藤行雄(小平市)
*瀬間陽子(国立市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で当地区会員になつた方の会費は無料です。(新規に現代俳句協会会員になつた方で当地区に入会ご希望の方は別途申し込み手続きが必要です。)
それ以外の方は年会費2千円です。
お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

満田 光生(光) 飛永百合子(百)
山崎せつ子(せ) 永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ご案内◇◇◇◇◇ 俳句研究会

第2回 2月24日(土) 午後1時

立川市こども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)
電話042・529・8682

第3回 3月30日(土) 午後1時

立川市こども未来センター

第4回 4月27日(土) 午後1時

立川市こども未来センター

(いずれも会費五百円、出句三句)

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

陽春句会

別紙ご案内の投句用紙で御応募ください。

特別選者選 賞品多数及び選者の特選賞

*同得点の場合には到着順により順位を決めさせていただきます。

会費 千円 投句と同時に支払ってください。

編集後記

☆戦火が激しさを増して年を越した。信念や正義を掲げると後には引けず、戦い続けるしかない。事実をしつかり見るべきだ。俳句のもつりリズムこそ最も大切だと痛感する。(光)
☆昨年はいろいろな事件や事故、災害等が多く起きた一年だった。迎えた今年こそ平穏な日々が訪れるよう祈るばかりである。世界最長詩と向き合う心もまた大切にしたいと思う。(百)
☆悲惨な報道とさまざまに向き合いながら新しい年を迎えました。俳句を作る人たちが殆どが高齢者の仲間入りし、盛り上げる力が問われます。あけぼの集にぜひ句を寄せて下さい。(せ)
☆頸椎の手術後歩行障害が思わしくなく、リハビリを続けているが一向に改善しない。腰椎にも症状があるとの所見で治療の決断を迫られています。年明けにも精密検査を受ける予定で校正などに支障が起きないようにしたい。(潮)
―題字は三橋敏雄氏―

令和六年一月二十七日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京都多摩地区現代俳句協会事務局

T181100115

三鷹市大沢21107

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

FAX 042213010934

印刷所

株式会社 清水工房

TEL 042162012626